

一栄谷の 私見



3月30日に東京の青

山公園に集合しての「令和の百姓二揆」開催が予定されているが、これに先立って2月18日に衆議院第三会館で院内集會が開かれた。ヨーロッパではトラクターを引っ張り出してのデモ行進は珍しくないが、日本ではめったにない「歴史的挙行」でもあり、そのキックオフとなる集會に足を運んでみた。会場参加の定員は催が50名か60名であったと思うが、開始15分前に会場に入ったところすでに満杯で、かろうじて一つだけ空席を見つけて座ることができたが、大変な混雑と熱気に驚かされた。実行委員会事務局の発表では会場参加が120名、オンライン参加は150名。さらに32名もの国會議員に代理での秘書の参加が7名と異例の大集會となった。

「安全おいしい国産の農産物をつくるために日々土を耕し、家畜を養い、自然と向き合い、農業を営んでいく日本の農家は、農業生産を通して地域の環境を守り、生態系を維持することにも努めてきた。しかし日本農業は「異常気象による災害、担い手不足、農業経営の赤字などに

より農家人口は年々減少し、食料自給率も38%（昭和40年）から38%（令和5年）と低迷しているのが現状であり、「夕木の海外依存度を考慮した実質食料自給率は2035年に11%になるといわれている。そうした中、かろうじて農家も『自給10円』程度で頑張ってきましたが、こ

NO FARMERS,
NO FOOD,
NO FUTURE

の現状を多くの方に知っていただき、生産者と消費者の声を農政に届けて行くことをねらいに行われるもので、「農家に欧米並みの所得補償を！市民が安心して食を手で生きる生活を！」をスロガンとする。20年ぶりに以上で食料・農業・農村基本法の改正が行われたものの、大規模化、生産性向上に偏重し、小農・家族農業を軽視する農政のスタンスに変化は乏しくもはやこのままでは日本農業は崩壊しかねな

い、今が日本農業の維持をはかるためのラストチャンスであるとして、「物言わぬ百姓たち」が立ち上がったものである。

この院内集會では、各地域より農業生産者からの状況報告が行われたが、水田稲作の生産者は「農家を切り捨てて日本は豊かになったのか」「あと5年、10年で水田稲作は崩壊だ」「今、米価上昇で少しはあっているが、経営が楽になったわけではまったくくない」と切々と訴えた。そして酪農家からの「赤字で金を払って搾っている」「補助金はもらったが、次の月にはなくなる。首の皮一枚でつながっている」「この3年間で1000万円ももつていない。まさに奴隷で、自尊心を傷つけられている」との悲痛な叫びには胸をぎゅられるような思いであった。

昨年5月に改正基本法が成立した後「令和のこゝろ騒動」が発生。10月の衆議院選挙では与野党が逆転。新米が出回ればこゝろ不足は解消するとの観測も強かったものの、需給は逼迫して米価はさらに上昇。ついに今年に入って政府は備蓄米の放出を決断。さらに米の輸入増加の一方で、減反廃止とあわせて輸出拡大を政府は自論む。農政転換は政権交代なくして困難であることは明らかだ。山場となる7月の参院選挙に向けて奮闘が期待される。

（農的社会サイエンス研究所代表）